

悲觀も愉し

悲觀も愉し

徳川夢聲

し 愉 も 觀 悲

止 廢 印 檢

昭和二十六年九月二十五日 初版印刷
昭和二十六年九月三十日 初版發行

定價二〇〇圓

著 者 德 川 夢 聲

發行者 東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
小 林 茂

印刷者 東京都文京區西江戸川町十九
藤 本 肇

發行所 東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
株式會社 創 元 社
(大阪 市北區 橋上町四五)

電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六九・大阪五七〇九九

印刷・綜合印刷、製本・石毛
萬一落丁・亂丁がありましたら取替へます

目次

色と慾の戒め	五
けた違いの人生	二六
浪曲殺人事件	三六
焦點の定義	四三
青鉛筆	六一
ネオ談林派	五五
わが初戀の記	八三
豆天才	九七

老いにけらしも……………	一〇五
親馬鹿天國……………	一三〇
坊やは哲學者也……………	一三五
不機嫌……………	一五一
幸福とは……………	一五七
海の彼方の娘より……………	一七三
わが悲觀……………	一八三
墓……………	二〇一
後記……………	二二七

悲
觀
も
愉
し

色と慾の戒め

1 色の戒め

私は、もう間もなく六十歳で、押しも押されぬせぬ老人と相成つた。もつとも、私がムセイ老と呼ばれるに到つたのは、昭和十一年「吾輩は猫である」の撮影中からであるから、老と呼ばれて既に十六年、昨年あたりからはムセイ翁などと昇格してゐる。

さてそこで色氣の方はどうか？ まだ大いにある。いや、イロ氣なんて上品なものではなくシキ慾の方はどうか？ それもまだ大いにとは行かないが、然るべくアルことはアルのである。シカルベクとは、どのくらいか？ さあ、そいつがどうも難かしい。

——いや、ワシはもうアノ方は全然ダメでござつてな。

などと吐す老翁が實は若い者を向うに廻して、コンクールをやらせたいくらい、堂々たるフアインプレイをひそかに示す場合がある。このバアイが、なかなか多いらしい。他のことは自慢したがる人種も、これだけはケンソンするのが禮儀になつてゐるからだ。そりやそうだろう、——總

入齒にして鶴の如きヨボヨボ爺さんが、アレだけ別人の如く颯爽たり、というのはどうも見つともない。

ところが、零落した斜陽族の、荒涼たる庭に、見事な石燈籠だけは、いつまでも残つてゐるやうに、空襲で焼かれた屋敷に、ストーヴの煙突だけ、片づかないで立つてゐるが如く、そこだけはどうも残るものらしい。

そこで、私が思うに、世の老人諸翁は、いずれも實は、シキ慾なかなか旺んるものがあるんではあるまいか。ただ、從來の禮儀作法を遵守して、ゼンゼンダメの御題目を唱えてゐるのではあるまいか。

——さては、汝は色慾旺盛だな。

一寸待つて下さい。そうとられては少し迷惑。私のゴトキものですら、この程度なのであるから、世の健康なる男性は、老いても定めし旺盛なのではないかと、想像するだけの話である。私のゴトキの「ゴトキ」を少し説明すると、

——ムセイ君は、女の方はダメだな。

と、若いころから私は云われていた。自分でも、まあ、ダメなんだろうと思つていた。たしかに、多くの知人たちと語り合つた結果、また多くの文獻を調査した結果、どうもダメという範圍に屬するようだ。

——ムセイ老は、もう女など全然御用がないだろうね？

などと、近來、屢々質問される。いや、必ずしもソーでないよ、と正直に答えるのであるが、相手はテンから問題にしない。私は、内心、忌々しくもあるが、また一面、ザマア見口という氣がしないでもない。

——てへ、シラネーナア！

と云つてやりたいくらいなもんだ。とにかく、まだまだ色慾のアルことは、嚴然たる事實である。従つて色慾なるモノは、私にとつて未だ痛切なる現實問題だ。だから、シキヨクのイマシメなど、御注文に應じて書く氣になるのである。

凡そイマシメなるものに、二通りある。一つは世人に與えるイマシメ、一つは自己に與えるイマシメ、即ち他戒と自戒だ。そして、これから陳述しようとするイマシメは、自己の經驗を通して、世の若人たちに與えるイマシメであり、それを主にして一面には、世の老人をイマシメる、というつもり。

——色慾はツツシムベし。

これが昔から行われる俗戒だが、私に云わせると言んでも發奮、

——色慾はツツシムべからず。

なのである。ヒトを見て法を説け、ヒトを見てイマシメを説けだ。私などは、前記俗戒のため、

たつた一度しかない生涯を如何にサクサクと貧弱なものにしたか分らんのである。ツツシメなどは、悪魔の甘言であつた。

——若い時に、道樂をしない人間は、老いてから如何なる大罪を犯したよりも、酷い後悔をする。

こういう先哲の言葉がある。若いころの私は、この天使の言葉を、單なるシャレかと思つた。世間一般の大道に反して、天邪鬼がそんな言葉の裏道遊戲をしてるんだと思つた。豈計らんや、私自身が老人になつてみると、これこそ千古の眞理を喝破した言葉だ。これこそ、人生の大道を示すものだつたのである。

今や私は、非常に後悔してゐる。イカナル大罪を犯したよりも後悔してゐるかどうか、こいつはどうもよく分らない。が、私の犯した數々の罪惡を考えると、まさに、その後悔よりも度が強いようである。殺人や強盜の経験がないので、あんまり威張つたことは云えない。然し、殺人強盜人種であつたら、色慾の衰えを嘆くこと、私以上に端的であるだろう。

この場合「道樂」という文字は、色慾方面にのみ限られた内容をもつての話。吾々にしてみれば「女道樂」のこと、女性にしてみれば「男道樂」のことと思つて頂きたい。

——若い時は身體は充分であるが、色の技巧を知らず、その技巧を修得せる時は、身體が用をなさない。

これも皆さん御承知の諺である。事實、若い時は本當に女體を喜ばせることが出来ないのが普通だ（天才は別である）。アレやコレやと知つて、漸く習熟した時は、もはやエネルギーがなくなつてゐる。さんさんお習字を勉強して、立派な書が描けるようになった時に、筆の毛は摺り切れ、墨汁は乾き切つて了つたようなもの。

よしんばそれが、他を感嘆させるような名筆でないにしても、自分でどうやら字の恰好がつくようになった時、素晴らしい白紙なり紅紙なりに出遇つて、思うように筆が振えないとは、甚だ残念であるだろう。

假りに前記の如く、見かけはヨボヨボで、若人に劣る健筆家であつても、そのヨボヨボがない。書を依頼する方は、やはり見かけを尊ぶからである。中國を旅行すると、大道の乞食に、素晴らしい書をかくのがあるが誰れもそんなものに額を依頼したりはしない。

——どうだいムセイ老、君ももう一度廿歳臺の青年に若返らすとしたら、喜んで應ずるだろうね？

左様。現在の脳味噌のままで、肉體だけ若返るなら、御願いしましょう。脳味噌もまた昔のムセイ青年に返るならまつ平御免である。何故なら、幸福感の自覺總量に於ては、現在の方がたしかに多いようであるからである。

第一、肉體が若返つても、またそのころの料簡に逆戻りでは、折角の色的エネルギーを、また

またツツシミて無駄にするばかりだ。そんな勿體ない話はない。こんな後悔は一度で済んだ。

子曰。已矣乎。吾未見好德如好色者也。

孔子が「ダメだなア、徳を好むこと、色を好むが如き奴を、まだ見たことがない。」と嘆じた、なんてことを中學三年にして習つた私たちは禍なるかなだ。

——してみると、イロなんてものは、よつぽど悪いものだな。

と、早合點して了う。冗談じゃない、徳を好むこと、色の如き奴が居たら、そいつは狂人だとしてよろしかろう。徳なんてものは、人間が理窟を考えるようになってから出來たもので、會社で云やあ顧問か囑託みたいなもの、色の方が遙かに人間本性の大黒柱で、會社の専務か常務みたいなものだ。會社の運営を、顧問や囑託にやられて堪るかである。

——女ト男ト豆煎リ、煎ツテモく煎リ切レナイ。男女七歳ニシテ席ヲ同ジウセズ。

などと、幼にしてツツシムことを餘儀なくされ、やや長じては修身、國語、漢文、體操などの時間で、矢鱈とツツシマされ、その上、世間からも慎しむべきはイロ道と、年がら年中聞かされて育つたのだから、肉體の方はすっかり準備態勢が整つていたのに、無理してそれを壓殺したようなものだ。

もつとも、このくらいに教育して、丁度、バランスのとれるような人間が、大多數なのかもしれないが、私の如き生れつきの人種は、すっかり脅えて了つて、あたら、その盛時を無爲にして

過したのである。

若いころ「アンナ・カレニナ」を読んで、ウロンスキーなる色男が一向平気で人妻と姦通するくだりに来て、私は實に啞然としたことがある。良心の苛責なんてものは、この人物には毛頭ない。私は、一種の羨望を感じたが、これはきつと人種の相違だろうと思つた。その後「赤と黒」を読んだら、この主人公のジュリアン・ソレルもまた、姦通に對して全然平氣である。いや、平氣ではない、逆に勝利の喜びしか感じないのだ。凡そ色慾の中でも、最もツツシム行爲が、寧ろ英雄的にさえ扱われている。以上の二小説に限らず、外國文學には、姦通禮讃の物語がザラである。どうも、姦通は男女間の美德であるというくらいだ。「ドン・ファン」「カザノヴァ情史」など、滔々皆然り。「アラビアン・ナイト」にせよ「デカメロン」にせよ、最も精彩あるところは姦通だ。そこへ行くと日本の文學は少し違ふ。姦通はツツシムベシという物語が多い。「源氏物語」みたいな昔のものは別として、近世のもので堂々と姦通を禮讃してゐるのはまず殆んど無い（戦後文學にはライサン型らしいものも出て來たけれど）。とは云え、文學の大多數は色慾ツツシムベシでなく、それどころか大いに戀愛行爲を勧めてゐる。

かくの如く、外國文學に教えられ、日本文學に激勵されてゐるにも拘らず、私は一生をツツシムで了つた。實に、残念とも遺憾とも、申しようがない。勿論、私と雖も、遠慮しいしい、良心の苛責などと闘いつつ、ケチな色慾行爲を致さんではなかつた。それがどうもナサケないのである。

何故、もつと堂々と、盛大にやらなかつたか！

現に私の周囲を見ても、平然として姦通をし、得々として二號三號をおいてる人間が一杯いる。それは決して例外というのでなく、反對に私の方が例外かもしれない。人間、例外的存在なんて、ロクなもんでない。私も人並みに振舞いたい。が、いかんせん、もう手遅れである。残されたるは、嘲笑的たるオイラクあるのみ、嗚呼。

さる美術界の故家で、女と二人きりになつたら絶対に口説くという人があつた。

——女とさし向いになつて口説かないのは相手を侮辱したことになります。

とその時六十歳の大家は信念を吐露するのである。ある時、腸チブスになつて重態で寝ていたが、流石の彼も衰弱その極に達して、どうにも身體が利かない。その時、ベッドの傍に付き添う看護婦に對し、

——實に、申し譯がない！

と、心の中で泣いて詫び入つたそうだ。なにしろ、口説いても、公約を果す自信がないので、ついその晩だけは、彼女を侮辱して了つたという話。

想えば、私などは實に女性を、侮辱し通しに侮辱して來たわけだ。何故、もつと尊敬しなかつたか！

——庄屋の婢でも云うちやあ見い。

という諺が、私の故郷にある。徳川時代の庄屋と云えば、その村の大名だ。その大名の妻と云えば、普通の百姓にとつては、身分違いの高貴の女性だが、それでさえも、とにかく一應は口説いて見る、という意味だ。

うムムム、そうだつたか、と私が感服したのが、既に老年になつてからだから、間に合わない。どんな男からでも、口説かれることは、女性にとつて決して悪いものでない、という事實を、何故若きころ私は知らなかつたか、バカバカバカと地団太ふむ思ひである。

さて、そこで世の若人たちにイマシメたい。

——イロをツツシム勿れ！

「何を云つてるんだ。餘計な心配すんな。アブレ青年で、ツツシム馬鹿なんて、一人だつてあるかよ。みんな堂々とやつてるさ。」

と仰言るんですか。いや、それなら結構、私はイマシメを少し改めよう。

——イロを好むことトクを好むが如く、絶対にソンするイロはツツシムべし。

パン助を買つて病氣になつたり、氣違い女に掛つて心中を迫られたり、社長の第2號と關係してクビになつたり、そういうソンイロだけはツツシムがよろしい。

「ムセイよ、下劣なことを云うな。ボクはあくまで精神的戀愛をもつて尊しとする。汝ごとき俗物には『天の夕顔』の主人公や『若きエルテルの悲しみ』は分らんであろう。」

いや、分ります。大いに分るんである。分つた結果、今日に到つてそれをバカバカしいと感ずるのである。もしも『天の夕顔』の主人公が、私の如く六十歳に近づいて、おもむろにその生涯をかえり見る時、果して身を噛む悔がないだろうか？ またエルテル青年が、あの時自殺をせず、エルテル老人となつたら、あの深き悲しみをバカバカしいと考えないだろうか？

ブラトニツク・ラヴ、決して悪くない。いきなり肉體の門に出入するより、一應はこういう時代があつてよろしい。いや、あつた方が一層、肉體の有難さが分る。けれども、ブラトニツクの迷信に一生捕われつ放しでは不幸この上ない。もつとも一生捕われて迷夢がさめないなら、主觀的にはそれでも幸福であらう。ところが、そうはなかなか間屋が卸さない。大抵は、死ぬ間際になつてヘソを噛むのである。これは悲劇だ。

以上、さも分つたらしく書いたが、目下は私もヘソを噛んでるけれども、もう少し老いが深くなつたら、もう噛まないようになるのかもしれない。まだまだ、冒頭に白狀したように、多少シキ慾が残つてゐるせいで、いろいろ後悔してるわけで、もう一步枯淡の境に入ると、そんなことはドーデモヨロシイとなるのかもしれない。その時、イマシメを書けば、もつと違つたものになるだろう。

實は、こうして書いてるうちに、大分、ドーデモヨロシイ氣分が起りつつある。

昆蟲類は、一回交尾をすれば、ドーデモヨロシイ境地になつてすぐ死んで了うのが多い。人間